# 田辺聖子さんの足あと ㊤

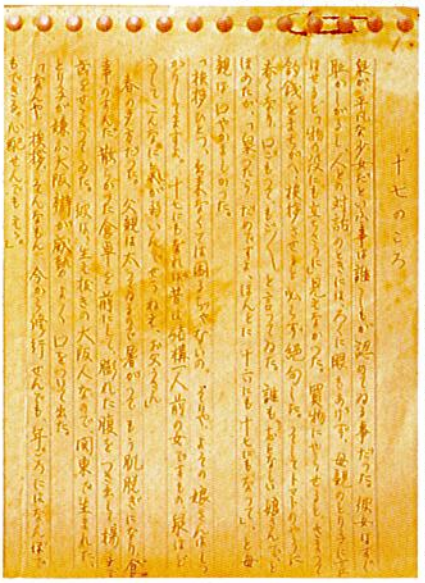
大阪樟蔭女子大学教授・田辺聖子文学館副館長　中 周子

## 「生きる楽しみ」の追求者

「戦争で世の中は暗かったけど、樟蔭は楽しかったわァ」。お会いする度に、そう言われた田辺聖子さんが、樟蔭女子専門学校在学中（昭和一九～二二年）に書いた短編に「十七のころ」がある。旧弊な考えの両親との裕福な生活に疑問を抱き、悩む十七歳の泉の物語である。

作品名は自伝小説『しんこ細工の猿や雉』に出てくるが、近年、原稿が発見された。

一読して目につくのは巧みな会話文だ。「泉ったら、だめですよ」「挨拶ひとつ、出来なくては困るぢゃないの」は口うるさい母親の台詞。「なんや、挨拶、そんなもん、今から修行せんでも、年ごろにはなんぼでもできる。心配せんでもえぇ」は娘に甘い父親の台詞。「いづみィ。どこぞ行たんか」。田辺文学の特色となる、カタカナやフリガナによる大阪弁表記の工夫が、すでに見られる。



㊤十代の頃の田辺聖子さん ㊦「十七のころ」の原稿＝田辺聖子文学館所蔵

場面構成も緻密に計算され見事であるが、それだけではない。時代と人間とを見据える冷徹な視座と田辺文学の真髄が見てとれる。田辺文学の原点とも呼ぶべき作品なのである。

田辺さんは、十七歳の時に大阪大空襲と敗戦を体験している。焼野原の死臭が漂う中を、何キロも歩いて家族に再会したという。地獄絵図さながらの劫火を目の当たりにし、半狂乱で肉親を呼ぶ叫び声を一晩中聞きながら、人間の生活が根こそぎ奪われてしまったことに呆然としたという。

泉を日に何度も襲う、息もつまるような苦しみは実体験であろう。「十七のころ」の随所に、敗戦直後の混迷の時代が透けて見えるのだ。

高等医学専門学校に通う先輩に出会い、鋭い刺激を受ける。先輩は、在外父兄救出同盟の医療活動やマルクス解説講座、文化活動に参加し、新しい時代を創造する意欲に燃えている。戦後、学生による戦地からの引き揚げ者の救済活動が全国的に大きな広がりを見せていた事実を、私はこの作品で知った。東京での在外父兄救出学生大会開催の記事が、昭和二〇年一一月一八日の毎日新聞にも載っている。

田辺さんの笑顔の中には、つねに時代の証言者たらんとする凜とした瞳が輝いていた。敗戦体験によるものだ。

「又、親子心中や、この頃はよう心中しよる」「これからいよいよ生存競争や。つまりは貧乏人が死んでゆかんならん」と、朝食を「舌を鳴らして食り食」う父親を、泉は嫌悪する。当時、日本中が飢えていた。新聞には「生活苦で親子心中した抱合死体が海岸に漂着」（毎日新聞、昭和二〇年一二月六日）等の記事が載る。

自分に何ができるのかと苦悩する泉は、働きながら女子

そして「十七のころ」には、田辺文学すべてに通底するテーマが読みとれる。泉が、先輩の疲れ果てた姿に、先輩も「幸せではない」と直感し、「未だ、私のもとめる真実の生活」に触れていないと確信するくだりだ。泉が求める「真実の生き方」とは何か。それは泉が車窓から見た美しい初夏の光景に象徴的に示されている。

「日ましに色づいてきた珊瑚珠のやうな苺」「豌豆は豊かに青い舟をつけ」「雑草にも一様に美しい緑の色が流れてゐた」「祝福すべき五月の朝」が、瞬時、泉を幸福な思いで満たす。焼け跡にも万物が息吹く初夏は巡ってくる。生き生きとした生命力の発現の中にこそ、真の生き方、人間の幸福はあるのだ。十七歳の田辺さんのメッセージは今も変わらない。

戦後の価値観の激変を体験した田辺さんは、「正しいこと」に懐疑的だった。一字違いの「楽しいこと」をすればいい、というのが口癖だった。「生きる楽しみの発見」こそが、何よりも大切なのだと。

現身の田辺さんは逝ってしまわれた。しかし、作家・田辺聖子は、作品の中に、読者の心の中に生き続けるだろう。これからも多くの読者の心をくつろがせ、笑わせ、励まし、感動させ、歴史や古典の愛好家や作家志望者を唸らせるだろう。

戦争の昭和と震災の平成を生き抜いた田辺さんが残した言葉と、日本の文学・文化史上に果たした多大な功績の研究を、今こそ始めなくてはならないと思う。

「楽しゅう読んでくれはったら、それでええねン」と、田辺さんはおっしゃるだろうけれど。

◇

6月に亡くなった作家・田辺聖子さんが残したものを、2人の文学者に振り返ってもらった。

＝次回は27日

ぶんかのミカタ

なか・しゅうこ　京都府生まれ。大阪府立大学大学院修了。言語文化学博士。著書に『拾遺和歌集論攷』、論文に「田辺聖子と古典文学」「田辺文学の原点」など。